

## 2. 中国の文化大革命

名目は「封建的文化、資本主義文化を批判し、新しく社会主義文化を創生しよう」という社会・思想・文化の改革運動。

しかし実質は、大躍進政策の失敗によって政権中枢から退いた毛沢東が自身の復権を画策し、民衆を扇動して政敵を攻撃させ失脚に追い込むための、中国共産党の権力闘争であった。

### <前史>

1958年 「大躍進」……第2次五カ年計画

農村に「人民公社」設立……単なる農業協同組合ではなく  
商工業・文教・民兵（軍事）の各組織、地方行政権能をも一体化

他に、鉄の増産のために、原始的な溶鉱炉を作らせて競わせる

→粗悪な鉄しかできず資源の無駄、燃料用樹木の大量伐採で環境破壊 etc.

→急激な変革、専門技術の軽視による失敗。

1959年 毛沢東、国家主席辞任

↓

劉少奇 国家主席、鄧小平 党総書記・副首相と協力し経済改革

人民公社は行政区画として残したが、生産はその下の生産大隊単位に小規模化

また部分的に農家の自主的生産も認める（=ソ連のNEP）

一定の成果をあげる

⇕

毛沢東はこれを「資本主義の復活」とみなし、思想的危機感を抱く

※ 1959. 7 廬山会議……国防相・彭徳懐が「大躍進は性急すぎた」と毛沢東を批判

→彭徳懐は解任され、国防相の後任は林彪に

### <文革第1期>

1965.11 姚文元が『海瑞罷官』を評すを発表……文芸作品を思想的に批判

海瑞は嘉靖帝を諫めたため投獄された明末の政治家。

毛沢東自らも、これを解任された彭徳懐を擁護する作品とみなす談話発表

1966.<sup>5</sup>/<sub>16</sub> 共産党、五一六通知……「プロレタリア文化大革命」の語が初登場

毛沢東が、国防相林彪と結び人民解放軍を利用して

劉少奇・鄧小平らを「実権派」「走資派」と批判し打倒を図る

### <文革第2期> = 紅衛兵の季節

1966.8 中国共産党第8期11中全会（=党中央委員会総会）

毛沢東「プロレタリア文化大革命に関する決定」

学生を「紅衛兵」に組織し、実権派の高級官僚や学者・芸術家を批判させる

大学ばかりか、無知な高校・中学生の少年少女らが「毛沢東語録」を手に、

「造反有理」を叫んで、教師らをつるしあげる事態に。

→都市部の知識人らを農村に送り強制労働（後にカンボジアのポル・ポト派もこれにならう）

## <文革第3期> = 奪権、文革の勝利

- 1967 “奪権”開始……文革派が実権派から権力奪取  
全国の省・市に「革命委員会」を樹立、従来の政府組織は壊滅
- 1968.10 劉少奇、失脚（翌年、幽閉中に病死）。以後、国家主席空席。  
鄧小平も失脚。（江西省に追放。毛沢東が「あれはまだ使える」として党籍も剥奪されず）
- 1969 九全大会（中国共産党第9回全国代表大会）……文革の勝利宣言  
毛林体制の確立（党規約に林彪を毛沢東の後継者と明記）

※ 1968年以後、通常の大学入試・雇用が行われず、紅衛兵の学生らは無職のまま運動に没頭。互いに抗争を始め制御不能になった。そこで毛沢東は、彼らに対して「下放」、すなわち農村へ下り学べ、という政策をとった。（10年間に1600万人を超える青年が下放させられた。）  
文革の混乱により、まるまる一世代が、まともな教育を受けられない、という事態が生じ、その後の中国の文化・経済などに大きな影響を与えた。

## <文革第4期>

- ▶ 林彪事件 ……毛沢東が国家主席廃止を提案した際、林彪は同意せず。以後、野心を疑われる。  
1971.9 **林彪**、毛沢東暗殺を企てるが失敗し飛行機で逃亡、墜落死。
- ▶ 脱文革・正常化へ……周恩来首相中心。1973.3 鄧小平、副首相に復活（.12 党副主席）。  
⇕  
“**四人組**” …… **江青**（毛沢東夫人）、張春橋（副首相）、姚文元、王洪文（党副主席）  
毛沢東の権威を濫用し権力にしがみつく  
↓  
1973.8 批林批孔運動……林彪批判、孔子（→周公旦→周恩来）批判  
⇕  
1975.1 鄧小平、筆頭副首相に。病気の周恩来を補佐

## <文革集結>

**1976年** 1/7 周恩来、死去

4/5 **天安門事件** ……周恩来追悼の花輪を四人組派が撤去、市民と衝突

4/7 **華国鋒** 首相就任。鄧小平、再び失脚（←四人組の最後の巻き返し）。

9/9 毛沢東、死去

10/6 四人組逮捕

10/7 華国鋒、党主席就任

1977. 7 鄧小平、副首相・党副主席として復活

. 8 十一全大会……文革終結宣言

1978.12 第11期3中全会……毛沢東信奉を続ける華国鋒失権、鄧小平が権力掌握  
華国鋒は首相辞任（80.9）、党主席辞任（81.6）

1981.6 以降、**鄧小平**は党軍事委員会主席として最高指導者（～89）

（83年、国家中央軍事委員会主席の地位を新設し就任、～90）

## 中国の歴代指導者

共産党 主席、82-総書記 (党軍事委員会主席兼任が原則)	国家主席 (1968-83 空席)	首相 (国務院総理)
1945-76 毛沢東 主席	1949-59 毛沢東 1959-68 劉少奇	1949-76 周恩来
文化大革命による混乱		
1976-81 華国鋒		1976-80 華国鋒
1981-87 胡耀邦 主席-82、82-総書記	1983-88 李先念	1980-87 趙紫陽
鄧小平 81-89 党軍事委員会主席 83-90 国家軍事委員会主席 (新設)		
1987-89 趙紫陽	1988-93 楊尚昆	1988-98 李鵬
<b>1989. 6/4 天安門事件</b>		
1989-2002 江沢民 (党軍事委員会主席兼任)	1993-2003 江沢民 (90-、国家軍事委員会主席)	1998-2003 朱鎔基
2002-12 胡錦濤	2003-13 胡錦濤	2003-13 温家宝
2012- 習近平	2013- 習近平	2013- 李克強

### ※ 鄧小平

党主席・国家主席・首相というトップの地位にはつかなかったが、党と国家の軍事委員会主席という、本来、党と国家のトップが兼任する地位について最高指導者として君臨した。

「改革開放」「社会主義市場経済 (共産党独裁下における市場経済)」という政策により今日の中国経済発展の基礎を築いた。また、一国二制度のもとでの香港返還も決めた。しかし、89年天安門事件では、共産党独裁に異を唱えることを許さなかった。

### ※ 1989.6.4 天安門事件

政治改革に積極的であったが故に失脚した胡耀邦がこの年4月に死去すると、彼を追悼する市民が天安門広場に集まり始めた。(1919年の五四運動から70周年でもあった。)

民主化を要求する市民の中に入って拡声器で対話した趙紫陽も、その直後に失脚した。

6/4未明、鄧小平は市民を武力で天安門から排除し、同月中に党総書記に江沢民を迎えた。

## ソ連の歴代指導者

共産党 書記長 (1953-66 第一書記)	国家元首 最高会議幹部会議長	首相 人民委員会議長-46 46-閣僚評議会議長
※レーニン在世中は彼が最高指導者 1922-53 <b>スターリン</b>	1922-38 <b>カリーニン</b> (中央執行委員会議長) 1938-46 <b>カリーニン</b> (最高会議幹部会議長) 1946-53 <b>シュヴェルニク</b>	17-24 <b>レーニン</b> 24-30 <b>ルイコフ</b> 30-41 <b>モロトフ</b> 41-53 <b>スターリン</b>
1953-64 <b>フルシチョフ</b>	1953-60 <b>ヴォロシーロフ</b>  1960-64 <b>ブレジネフ</b> 1964-65 <b>ミコヤン</b>	1953-55 <b>マレンコフ</b> 1955-58 <b>ブルガーニン</b> 1958-64 <b>フルシチョフ</b>
1964-82 <b>ブレジネフ</b>	1965-77 <b>ポドゴルヌイ</b> 1977-82 <b>ブレジネフ</b> (77年憲法で党書記長と同格に)	1964-80 <b>コスイギン</b>  1980-85 <b>チーホノフ</b>
1982-84 <b>アンドロポフ</b> 1984-85 <b>チェルネンコ</b>	1983-84 <b>アンドロポフ</b> 1984-85 <b>チェルネンコ</b>	
1985-91 <b>ゴルバチョフ</b>  91.8 共産党解体	1985-88 <b>グロムイコ</b> 1988-90 <b>ゴルバチョフ</b> (90年憲法で大統領制に) 1990-91 <b>ゴルバチョフ大統領</b>	1985-91 <b>ルイシコフ</b>  91.1-8 <b>パブロフ</b> クーデタ失敗で逮捕

### ※ **ゴルバチョフ**時代

1985 ～ 「**ペレストロイカ** (改革)」「**グラスノスチ** (情報公開)」

1986 **チェルノブイリ** 原発事故

1989 東欧民主化にも干渉せず (→ゴルバチョフは翌年ノーベル平和賞)

// .12 **マルタ** 会談・・・ブッシュ米大統領と会談、冷戦終結

**1991年.** 6 COMECON解散

7 ワルシャワ条約機構解散 (すでに2月に軍事機構解体)

// ロシア共和国大統領にエリツィン就任 (ゴルバチョフ批判の急進派)

8 パブロフ首相らのクーデタ失敗 (ゴルバチョフ軟禁されるがエリツィンが彼を救出)  
→共産党を解体

9 バルト3国独立達成

10 KGB (国家保安委員会) 解散

12/8 ロシア・ウクライナ・ベラルーシ3国、独立国家共同体(CIS)結成

12/25 ゴルバチョフ退陣、ソ連邦消滅宣言。

15 共和国のうちバルト3国とグルジアを除く11国がCIS加盟



## <チェコスロヴァキア社会主義共和国、1960 までは戦前のまま共和国>

支配政党……共産党

- 1968. 1 ノヴォトニー第一書記辞任。後任の第一書記に **ドブチェク** 就任。
- . 3 ノヴォトニー大統領辞任。後任スヴォボダ (～1975)
- . 4 党中央委員会、自由化の行動綱領採択。= 「**プラハの春**」
- . 8 テイトー (ユーゴ、9日)、チャウシェスク (ルーマニア、15日)、チェコ訪問
- . 8/20 **チェコ事件**  
ソ連・東独・ポーランド・ハンガリー・ブルガリア 5 カ国軍、チェコ侵入。  
翌日、ドブチェクをモスクワへ連行。  
ルーマニア・ユーゴスラヴィア・アルバニアは軍事介入を批難
- 1969. 4 ドブチェク解任。フサーク第一書記 (-1987、ヤケシュに譲る)。
- 1975. 5 フサーク大統領 (-1989)
- 1989. 10/28 プラハで反政府デモ始まる。→**ビロード革命**
- . 11/19 劇作家ハヴェルら、**市民フォーラム** 結成
- . 11/22 ドブチェク元第一書記、党幹部の退陣要求声明発表
- . 11/24 ヤケシュ第一書記ら党幹部一斉辞任 →複数政党制での選挙
- . 12/28 ドブチェク連邦議会議長 (-92.9 交通事故死)、**ハヴェル** 大統領を選出。
- 1993. 1/1 チェコ共和国とスロヴァキア共和国に分離。(連邦解消)  
チェコは引き続きハヴェル大統領 (～2003)

## <ルーマニア人民共和国、65 ～社会主義共和国>

支配政党……共産党

- 1963. 3 党拡大中央委員会、COMECON の総合計画に反対決議
- 1964. 4 党拡大中央委員会、自主路線の党声明採択。ソ連と距離を置く
- 1965. 3 **チャウシェスク** 第一書記就任  
→1968 年、チェコ事件に参加せず。1974 ～大統領。やがて個人独裁化
- 1989. 12/16 西部で反政府デモ
- . 12/22 軍が民衆側についたためチャウシェスク政権崩壊
- . 12/25 チャウシェスク夫妻処刑
- 1990. 5 自由選挙。救国戦線のイリエスク大統領当選

## <ブルガリア>

- 1989. 11 ジフコフ共産党書記長・国家評議会議長辞任
- . 12 党の人事刷新、ジフコフら追放
- 1990. 1 人民議会、共産党の指導的役割の条項を憲法から削除

## <アルバニア>

- ホッジャ労働党書記長 (1946-85 死) ……対独抵抗、共産党創設 (1941) 以来の独裁的指導者  
中ソ対立で中国寄り、1968 ワルシャワ条約機構脱退。文革終了で中国とも断交、孤立化
- 1990 以後、次第に開放路線へ。1992 年選挙で非共産主義政権成立

## <ユーゴスラヴィア>

- 1918 セルブ・クロアート・スロヴェーン王国独立  
セルビア国王を王とする ⇔ セルビア人主導に対する不満
- 1929 ユーゴスラヴィア王国と改称、憲法停止、国王独裁

- 1941 ナチスドイツと同盟。その直後、国軍クーデタで政権崩壊  
→ナチスの侵攻を受け降伏  
※ナチス占領下、親ナチスのクロアチア人勢力がセルビア人を迫害

↓

**ティトー** 率いるユーゴスラヴィア共産党のパルチザンが独力で解放戦勝利

- 1945 ユーゴスラヴィア連邦人民共和国成立……ティトー首相 (-63)、大統領 (53-80)

- 1948 ティトー、スターリンと断絶。ユーゴ共産党はコミンフォルム除名  
1961 第1回非同盟諸国会議 (ベオグラード) ……非同盟諸国のリーダーに

※自主管理社会主義……資本 (企業) は労働者所有、経営者は労働者が求人する

※各共和国に大幅な自治権……「七つの国境、六つの共和国、

五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」

※ティトーは、父がクロアチア人、母がスロヴェニア人

ある程度の体制批判は許容するが、民族主義的言動は排除した。

1980. 5/4 ティトー死去。 1984 冬季サライェヴォ五輪

1989. 3 市場経済導入約束。  
セルビア内コソボ自治州 (住民はイスラム教徒のアルバニア人) の暴動
- 1990 複数政党制による自由選挙を認める

1991. 6/25 スロヴェニア、クロアチアの独立宣言、.9/8 マケドニア独立宣言  
→セルビア中心のユーゴ連邦軍と戦争状態に  
スロヴェニアとは十日間で終了、マケドニアからも 92.3 連邦軍撤退

**クロアチア紛争 (～ 95) ……戦前からのセルビア人・クロアチア人の対立**

1992. 3 ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、住民投票で独立賛成多数。独立宣言  
ムスリム系 44%、クロアチア人 17% vs セルビア人 33% (投票ボイコット)

. 4 **ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争 (ボスニア紛争～ 95)**

1992. 4/27 ユーゴ解体。セルビア・モンテネグロのみで「ユーゴスラヴィア連邦」

- 1998～99 コソボ紛争……99 NATO 軍事介入

※ミロシェヴィッチ……セルビア大統領 (89-97)、ユーゴ大統領 (97-2000)

退陣後 01 年逮捕。コソボでの人道に反する罪で逮捕。

国連旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷 (ハーグ) にて裁判。2006 年獄中死去。

2003 ユーゴは「セルビア・モンテネグロ」に改称

2006 セルビア、モンテネグロ分離独立

2008 コソボ自治州、セルビアから独立

<東ドイツ=ドイツ民主共和国> 支配政党……社会主義統一党 (SED)

1946年、ソ連占領地区において共産党と社会民主党が合併

国家元首 (国家評議会議長)	党書記長
ピーク (大統領、1949-60)	ウルブリヒト (1949-71)
ウルブリヒト (議長、1960-73)	
シュトフ (1973-76)	ホーネッカー (1971-89)
ホーネッカー (1976-89)	
クレンツ (1989)	クレンツ (1989)

1961. 8/13 ベルリンの壁建設……労働者流出防止

西独ブランド首相の東方外交

1972 東西ドイツ基本条約 (相互承認)、1973 東西ドイツ、国連加盟

1989. 5/2 ハンガリーがオーストリアとの国境フェンス撤去  
→東ドイツ市民が西側へ流出

・ 9/4 ライプツィヒ、ニコライ教会における平和のための「月曜礼拝」後のデモ  
→以後、「月曜デモ」が続く

↓

・ 10/9 ライプツィヒで市民7万人のデモ  
ライプツィヒ・ゲヴァントハウス楽長クルト・マズアの呼びかけに  
地元 SED 幹部も同調。鎮圧策をとらず。

・ 10/16 ライプツィヒ、10万人のデモ。これに対しホーネッカーは鎮圧指示。  
しかしクレンツは反対。軍参謀総長も命令拒否。

・ 10/18 ホーネッカー退陣。後任クレンツ。

**1989年11月9日 「ベルリンの壁」崩壊**

クレンツ政権、翌日施行予定の「旅行許可に関する出国規制緩和」決定。

同日夕方、シャボウスキー政治局員は、内容をよく把握しないまま記者会見で

「東ドイツ国民はベルリンの壁を含めて、すべての国境通過点から出国が認められる」と発表。いつからか、という質問に「私の認識では『ただちに、遅滞なく』です」と答えてしまった。(政令には「直ちに施行する」「遅滞なく」と書かれていた。しかし彼は正しい施行日 11月10日を知らされていなかった。)

→記者会見を見た東ベルリン市民がベルリンの壁の検問所に殺到。

→困った国境警備隊の現場指揮官は同日深夜に独断で検問所を開放。

・ 12 社会主義統一党、一党独裁を放棄

1990. 3 初の自由選挙。早期の東西統一を目指す勢力勝利

**1990年10月3日 東西ドイツ統一。** ドイツ連邦共和国 (西) に東が吸収される。